

インタビュー 近藤和彦氏に聞く

とき 1989年7月7日

ところ 東京大学本郷 近藤研究室

企画・採録・聞き手 橋場弦

寅次郎「研究してなにンなるんだよ、それが。」

さくら「知らないわよ、そこまで。」

おばちゃん「わかんないおとこだねえ、そうやって偉い学者の先生方がいろいろ研究してくださってるからこそ、あたしたちがこうやって平和に暮らしてられんじゃないの。」

「男はつらいよ 葛飾立志篇」 1975年

1. 「君は誰ですか?」「3年の近藤です」

橋場:東大にいられてからもう一年たちましたが、最近の学生なんかをご覧になって、いかがですか。

近藤:正直言って、去年4月に来たときには、空いた口がふさがらないっていう感じで、なんだろうこれっておもったんだけど・・・(笑い)。

橋場:具体的にどういうことですか。

近藤:僕も昔は本郷の学生だったんだけどね、1968年に本郷へ上がってきたんだから、88年4月に戻って来てちょうど20年経っていたわけね。20歳のころの僕もそれなりに幼稚だったけれども、ちょっと余りにも学生たちが物を読んでいない、読もうともしないし。学生もそうだし、なんとなくこう、本郷の建物が汚くなったという印象があるね。ここも上って来る階段がかなり汚いでしょ。

橋場:昔はもっときれいだったんですか?

近藤:きれいだったという印象はないけど、でもこんなに汚かったかなあって思うんだ。

橋場:(その学生についての印象は)学部の学生についてだけのものでしょうか、それとも大学院生も含めてのことでしょうか。

近藤:大学院生もなんかこじんまりしてね、例えば近現代史の院生たちはね、マスターのうちに争って休みになると(外国に)行きたがるでしょ、で1カ月か2カ月、むこうに滞在して、図書館や文書館に行って(史料を)わっと漁って帰って来るとというのが随分いるみたいだけれども、そんなこと僕らの時には考えられなかった。僕の年代というのはみんな、むこうの政府のお金で留学する時に初めて外国に行ける、ということだね。それは必ず修士論文書いてから1年か2年は経っていたし、僕はもう30歳過ぎてたし、それなりに日本で研究

してから行った訳です。それがねえ、修士論文を書くまえに行くって言うのは……。まえに朝日新聞の夕刊に、本郷の西洋史はなかなか留学させたがらない、駒場ではどんどん留学させている、で、こういうふうに(駒場では)成果が上がっているではないか、って書いてあったけども(笑い)、そりゃあ、行っちゃいけないとは言わないし、外国をいっぱい見てね、それから自分の研究をやる、昔昔の羽仁五郎みたいにね、外国生活をした後で日本史をやるというのは、大変良いことなんだけれども、ほんの1、2カ月、むこうに行って目指す史料だけをもって帰って来るというのは、とっても良くないことだと思うんだよね。あるだろうなと思って、取りに行ったものを取って帰って来る訳で、略奪して帰って来る訳で、むこうに行ったら、根本的に問題を立て直すとか組みかえるとかいう経験をしなくてまずいと思うんだよね。古代史の皆さんはそんなふうには浮足立っていないみたいで(笑い)、腰を落着けて勉強するというパターンができていたみたいで、それは良いことだと思う。少なくとも修論仕上げるまでは。

そういうこともあって、なんか院生の勉強がディーテイルに互っているんだけど、ものすごくこじんまりして小粒になってきているんじゃないか、っていう点でも昔と随分違っていると思う。

橋場:68年に本郷に上がって来られたということですが、卒論を書かれたころの話をお聞きたいのですが。68年という周囲の状況と、卒論を書いたときの問題意識との有機的な関連みたいなことで、思い出されることなどを……。

近藤:僕はそもそも東大に入ったときには西洋史に行こうなんて気はなくて。高校生のころ、世界史だったかなあ、先生がマルクス主義の紹介なんかしてくれた。マルクスの良さと、現実の社会主義国家のつまらなさとか閉塞性みたいな事を話題にしてくれて、僕は授業の後で「先生、僕、それ大学に行ってちゃんと研究します」なんて言った場面を思い出すけどね、(笑い)高校2年生ぐらいの時。

大学は文Ⅱだったんですよ、ちょっとは近経やってみたけども、やっぱり肌に合わないということが分かって、もうすぐに文学部に転部するということを考えていた。そのころは初期マルクスの研究とか、ウェーバー研究とかが盛んに行われていて、マルクスとウェーバー、あるいはマルクスかウェーバーという問題意識を僕らは共有していた。で、マルクスやウェーバーをやるのなら、文学部の社会学か西洋史かなあ、と思っていた。堀米庸三さんがいらしたこともあって、(西洋史に)進学してきたんですよ。そのころは卒論ガイダンスというのは4年生しかやらなくて、4年生の卒論ガイダンスに(3年生の)僕は出て行ったんだけど、林健太郎さんが、「なんか変なのがいる」って(笑い)・・ ようするに4年生じゃないのが一人いた訳でしょう。「君は誰ですか?」「3年の近藤です」(笑い)いや、そう言われる前に僕は発言し始めていたんだ、どういうテーマで卒論をやるかについて。ウェーバーを読んだし、中世都市について文献カードもこれくらい(と指で示す)つくったと(笑い)、いう話を始めたら、「君は誰だ」ってね、「そんならいいです」といって発言を止められ

てしまった。(笑い)

そんなことをしているうちに6月15日の機動隊導入でもう授業はなくなるし、それから無期限ストが1年半、69年の12月まで続いて、授業がなかった訳だけど、でもそのあいだ『古代ユダヤ教』を読むために野尻湖に合宿に行ったり、読書会やスト実とかでいろんなことを話した、それがとっても良かったと思います。東大闘争の最中にいろんな議論をしてマルクス主義の文献になじんでいる訳で、いろんな諸党派の解釈についてのかかなりポジティブな批判とか、僕自身もある党派的な立場から批判するとか、そういうのを随分書いたりしていたけど。

授業再開のころにいろいろレポート書いたりするのに、例えば1848年におけるマルクス・エンゲルスとかね。まあ、近代の民衆運動というか社会運動みたいなものをやりたいな、と思っていた、卒論はね。あるときに柴田(三千雄)さんが家に招きいれてくれて、君はどういうことをやっているの、とか、ホブズボームは面白い、とか、いろいろ聞いてくれた。まあ、近代史もおもしろいな、と思うようになってきたんですよ。日本の西洋史研究で一番進んでいる領域というのが、どうもイギリス近代の社会経済史だと。僕らとしても資本主義社会の矛盾というか、固有の運動法則というか、そういうのを研究すべきであると。イギリス産業革命期を研究すべきである。でそこで起こっていた民衆運動をやろうと考えたんですよ。それについての良い史料が、マンチェスターという町で出ていた新聞二つのマイクロフィルム。労働運動関係のパンフレットも復刻されていた。史料的に恵まれていたということもあったし、また「これをやらねばならない」ということもあって、やってみたら、書けちゃった。書けちゃったとはいえ時間的にはかなり無理があってね、とにかく1年半単位を取ってない訳で、5年生の時に全部取らなくちゃならなかったから、ほんとに大変だった。そのころは変則で、大学院入試のほうさがきにあって、そのあとで卒論は4月に出すと……

橋場:4月に出すんですか、いいですねえそれ。

近藤:卒論がだめだったら入学取り消しということになっていた。

橋場:具体的には、どういうテーマでしたか。

近藤:「イギリス産業革命前夜の民衆運動－マンチェスターの1757年から58年」

橋場:最初ウェーバーやマルクスからはいつて来たというのは、アカデミックな入り方ですよ。

近藤:資本主義社会の固有の運動法則に抗った民衆のエートスみたいなものがある、だから発想は純粹にマルクス主義的なんじゃないかった。書いているうちに、図式的な、いわゆる人民闘争史観的なものを批判するようになって来たわけ。

70年代に入ると、内ゲバがものすごく、ほんとに厭な思いをするんだけど。それから連合赤軍事件が……。よど号や浅間山荘よりなにより、死体が次々に発掘されたときはね、あれはもう、どうしようもなかった。

橋場:そういった、先生の周りで起こっていたできごとと、学問的な問題意識とのかかわりは、どんなものだったんですか？

近藤:それはもちろん僕達の世代にみんな共通しているんだけど、山本秀行とか福井憲彦とかー(みんな)同じようなことを考えてるんだよね。まだまだ70年代の始まりにはね、日本はいずれ社会主義にならねばならないと思っていたよ(笑い)、そして、今あるマルクス＝レーニン主義ではまずい、そのためになにかこう見付けたいという事がある。それが連合赤軍事件と、いわゆる新左翼の中での内ゲバ、殺し合い、その最後の仕上げが、80年の5月、桑原(洋)さんね、学生達と合宿に行った先で鉄パイプで襲われてやられた。僕は本来あまり党派的な人間じゃないけども、集会に出るときに、何らかのグループに属しているということがあるよねーそれが、別の敵対的なグループの中に自分の友人の顔を見付けて、たがいに気まずい思いをしたり…。夜中に見るつらい夢の一つに、内ゲバでやられる所とか、それは悪夢としてずーっとあったよね。

橋場:ひー。

近藤:最近は、きわめてアカデミックになっちゃって……。研究していることが、アクチュアルなそういう厭世世界からの逃避、コンペンセーションという意味もあったんだろうね、深層心理には。

橋場:そうすると、いまではアカデミックになっちゃったということでしたけれども日本はいずれ社会主義にならなければならないという最初の考え方からは、離れてしまったということになりますかね？

近藤:あの一、学生運動はちゃちな政治だけれどもポリティクスの世界でしょ、ポリティクスの世界というのは、自分がいかに誠実であって、一所懸命考えて、よかれと思ってしたことでも、状況次第でどういう風にでもなっちゃう。自分の意図とは関係なしに大きな潮流の流れのようなものに流されてしまう、それってつらいことなんだ。それがね、研究者の世界というものは比較的そういうことがない。インディヴィジュアルにやって行ける世界だからね。会社に就職した人に比べてもそうかもしれない。…。比較的インディヴィジュアルにやって行ける世界というのは良いなあ、と思うようになったところがあるんですよ。ただ高校生のころから、分野はわからないけれども、なんか学者・研究者というのでもいいなあ、と思ったこともあるんです。読書三昧の生活も良いなあという(笑い)それだけのことだったと思うんですけどもね、もうちょっとこう、自分で考えたり人と討論するときの自由とか、構想する精神的自由みたいなことは、やはり68年前後のいろんな経験をしたうえで、その価値はもっと良く分かって来たと思うんです。

2. 「広い意味での社会主義へ」

橋場:先程の、社会主義への日本の進むべき道、という実践的な関心というのは、今はどうな

んですか？

近藤：広い意味での社会主義、ソーシャリズムになって欲しいと思うんだけど。

橋場：広い意味？

近藤：うん。ただ、それを担っていく集団というのが必要ですけども、(それは)いまの日本にはない。そういう意味で、大学みたいなところで、こういうふうに(笑い)ウダウダと(議論している)、そういうことをしばらく繰り返して行くことになるでしょうけども。もうちょっとね、いろんな経験をしていろんなことを考えている人達が集まって討論する場、フォーラムみたいなものが必要だと思うんです。それが今の日本にはなくて、大学の先生は中年になると忙しくなっちゃうし。どうも現代日本の知のありかた、という点で良くないと思うんだよ。

橋場：そうするとやはり今でも、日本は広い意味での社会主義に進んで行って欲しいとお考えですか？

近藤：社会主義という言葉で誤解を招くとしたら、我が日本がこのままで良いはずがない、なんとかしなくちゃいけない・・・

橋場：それは誰でも考えますけどね。

近藤：(笑い)そうかな、ほんとにみんな考えているのかな。やっぱり年収1000万あって欲しいとかね、そのレベルでの発想が多くなっているような気がする。自分はいまうまくやっている、あいつは割りを食っているっていう発想法で、世の中全体をなんとか編成替えしていかうという発想は、どうもないような気がして・・・。

橋場：なるほど、そういったエコノミック・アニマル的な発想が、いまになって家庭内暴力とか、いろんな形で心身症とかというかたちになって現れて来ているのでしょうね。

ちょっと話題を変えまして、さきほど最近の院生の傾向として、専門の細分化・タコツボ化という現象が指摘されましたけれども、こういった現象は何故起きたと考えるべきなのでしょうか？たとえば、先生が卒論を書かれたころには、史的唯物論といったグランド・セオリーがまだ生きていて、個別研究といえどもそれに引っ張られていたと言えるかも知れません。今日、そういう全体史的な視点というものが失われてしまったのは、どこに原因があるのでしょうか。

近藤：グランド・セオリーという点では、僕らのころも、60年代後半だから、もう崩壊し始めていた。でも崩壊し始めているけれどもみんなが一応読んでいた。みんながそのことをフレイム・オヴ・レファランスとして知っていた。だからそれを批判するにしても共通の了解事項になっていたんですね。それがいまや80年代ともなれば、学生はマルクス・ウェーバーなんて読まないんでしょ。(笑い)共通のフレイム・オヴ・レファランスがないわけですよ。それは価値が多様化したということで、良いのかもしれないんだけど。単なる虚妄の権威は無い方が良いのですが、ただ、いまのアメリカやヨーロッパの学生達は逆にマ

ルクスを読み直したりするんですよ。ウェーバーもね。なんかこう、位相として逆転していてね。ウェーバーやマルクスを読むことによって良い研究が出ているしねえ。(ヨーロッパやアメリカの研究者は)新鮮な気持ちで読んでいる。なにか教典のように読むというんじゃないくてね、ひとつのインスピレーションに満ちた本として読むという、そういう態度は必要だと思うんですよ。

それともうひとつ、学生もそうだし、もしかすると研究者たちも、とくに若い研究者たちは、お互いの書いたものを読まないんじゃないかという気がする。

橋場:読んで解らない。それこそタコツボ化現象ですね。他人の言語が、余程専門が重なっていない限り解らない。また書くほうとしても、素人にも読ませたいと思って書くと、それは(専門の)論文じゃなくなってしまうという……。

近藤:そこは本当にそうだろうか。素人といっても、もちろん少なくとも大学生以上の人はね、ちょっと読む努力をすれば何とか解ってくる。ごくごく細部のね、この論証の仕方の良いのかということは分からないにしても、大筋を読んで面白いテーマであると思うかどうかは、あるはずでしょ。そういう読者向けに、ほんのちょっとした工夫が出来ると思うんだよね、レベルを下げることなしに。専門誌では「史学雑誌」とか「西洋古典学研究」とか大学の紀要とか一わりあいにそういう工夫、配慮なしに書くでしょ。たとえば「思想」みたいなところでは比較的それを配慮せざるを得ないじゃないですか。ぼくのイギリス史の友人に言わせれば、あんなのは素人向けの文だなんて時々批判されることがあるんだけど、でもね、大事な部分をもう一度確認しながら、しかし、きちんとしたことを言うことができるはずなんだ。書き手としてもワイダー・オーディエンスを想定して書くべきだし、それからすくなくとも院生とか助手とか若い研究者は自分の専門外のことも勉強するべきだと思う。

橋場:今のお言葉は、非常に力強いものがあつたとおもうのですが、一方ではね、院生とか助手とかは、何のために論文を書くのかと言えば、まずは履歴書(の業績表)に書くためでしょう?

近藤:えっ、そんなモチベーションで論文書くわけ?

橋場:いえいえ、私が、とはいいませんがね(笑い)、ワイダー・オーディエンスを意識する前に、まず狭い意味でのニーズに答えなければならないというのがあるじゃないですか。例えば、ドイツ中世史のひとは、まずはドイツ中世史の専門家に認めてもらえる論文を書かないと話にならない。つねにそこには一種の危険が伴いますよね、専門家だけに解ってもらえれば良いのだという。しまいには自分が知の自閉症・学の自閉症に陥ってしまう。

近藤:そのとおりだけでも……。ある専門分野の水準に達していなくちゃあ、専門誌に載らない、あるいは修士論文として通過しない。でもね、それは必要条件だ。修論審査のときに我々が議論していることはね、例えば、1848年のボヘミアを専門にしている(教官は)ひとりもないわけだよ。いなくて何を議論しているかというとな、これはおもしろいかどうか、

ワイダー・レレヴァンスがあるかどうか、ということなんだ。要するにね、彼は細かい論証をもとにしてどういう議論(アーギュメント)を展開しているか、他の時代や社会に適用出来るような議論を展開しているかどうか(を審査している)。こいつは間口の広いやつだ、あるいは力のあるやつだ、というのは、そういうことをみて言っているんだよね。

その場合に、アカデミックな水準に達しないと、力のある議論というのは出来ないんだ、残念ながら。最初から大向こうの受けばかりを狙っているのは、歴史学の場合は、全然だめで。少なくとも、良識ある読者たちは、そこを見ていると思うな。

3. 「今を絶対化しない共通感覚」

橋場:わかりました。ではまたちょっと問いを変えましょう。何ゆえ人は歴史を学ぶのでしょうか。

近藤:やはり、今とは違う人間の生き方、今とは違う世の中の在り方、というものを求めているんだろうね。例えば文化人類学・民族学の研究者たちとそういう点では、共通していると思いますね。歴史学は、人類学と違って時間的な変化をフォローすることが好きなんだ。その点で人類学より深い見方が出来るかもしれない。異文化を時間的な変化も含めて観察する、あるいは再構成していく……それは研究者からすれば、書き手からすれば、それを再構成するのが、あたかも推理小説を自分で書いていくようでおもしろい。また読者としても、そういう異文化を、時間的な変化も含めて知りたいと……そうすることによって今の世の中の在り方・人の生き方を相対化する、相対視することによって、今が唯一絶対じゃないんだと、ってことは今の世の中の在り方を変えることが出来るんだという共通感覚みたいなものがね、歴史を読むことによって出来ていけば良いと思う。それを国民の広い層が共有しているなら、かなり健全な国だと思うんだけどね。今を絶対化しない、現在あるものに執着しない、共通感覚がある世の中というのはね。

橋場:まあ、よく聞く意見ではありますけどね。かりに歴史学はそうしたことのためにあるとして、実際にはそういうニーズに応えていることになるのでしょうか。もっと歴史学という現象を大きくとらえた場合にね、つまり、我々学生が日常やっているようなことも含めた場合には、院生は何はともあれひとつでも論文を専門誌に載せることに汲々としていともいえるし、また、学会の在り方も、一般の人々が自分達に何を求めているのか、自分達が何のために必要とされているのかという問題を問い直す以前の段階にあるように思います。そういう意味では実際には歴史学も、先程述べた学の自閉症に陥っているようにも思います。

近藤:それは歴史だけでなく、人文学全体について言えることだと思うんです。歴史学・人文学全体に互って、一種の知的エリート主義だよね。今の世の中を相対化したり、精神的に自由な視点を獲得するために書いたり論じたり勉強したりしているわけでしょう。

それが世の中にとって、八百屋のお母さんにとってどういう意味があるのかと言ったら、何の関係も無いかもしれない。(笑い)ただ、そういう精神的に自由な営みをしている人達がある程度多い世の中というのはーいまの人民中国はそうでないとおもうんだけどー豊かな余裕のある社会だよ。(笑い)

ヨーロッパは、本来そういう知的自由人の暮らし易い世の中だから、世の中全体がそういう人達にとって都合の良いシステムになっている。今の日本は残念ながら知的自由人にとって居心地の良い所じゃない。国立大学を見てもね、財政的な裏付けはすごく硬直しているし、院生たちに対する奨学金だとか生活の保証とかいう点で、すごく弱い、特に人文科学に対してはね。

橋場:しかし、人文科学の場合、少しでも国民の生活を楽しむための研究であるとかいう大義名分が無いですからね……。

近藤:科学研究費はね、癌特別研究とか、あるいは、石油やエネルギー資源に関係するイスラム圏の研究とか、そういうものだったらがっばと政府からお金が出て来る訳だけれども、…そりゃ、経済効率を考える日本政府の一大方針、一大原則からして当然のことだよ(笑い)。

橋場:でも、誰だって癌にはかかりたくないしね(笑い)。むしろ歴史学も、こういうふうに我々は自分達の研究を社会に還元しているんですよ、ということをねーそれはどういう形でかは僕も想像も付きませんよーそういうことをむしろ積極的に社会にアピール出来るような研究をしていくべきなんじゃないんでしょうかね。

近藤:こたえはイエス・アンド・ノウだな。(笑い)たとえば学振の奨励研究員という制度は、僕らのころにはなかった。そういう点で少し良くなった、君のような有為の研究者に適用されるようになった……

橋場:いいえ、ちっとも有為じゃないですけど……。

近藤:でもこれをヨーロッパ・アメリカに比べると格段に悪い。いわゆるフェローシップみたいなものは、もっと豊富に出ている訳で、人文科学に対してもね。だから日本ももっと、歴史学を初めとする人文科学に、税金でもって援助すべきである、と言うために、ほら歴史学は現実に関に役立っていますよ、実学ですよ。それ、言ったほうがいいかもしれない。まあ言う場合には、例えば癌の研究まではいいけど、染色体の研究して、妊娠した子供の染色体を調べる、で、どういう遺伝の因子があるのか、その点数が80点以上あれば順調に出産に至らしめる、80点未満なら殺す、なんていう研究は幾らでも出来る訳でしょ。あるいは79点だから何らかの方法でそこに遺伝子を足して82点にするというやり方だって今に出て来るかもしれない。そういう自然科学とか医学とかのとんでもない展開に対して、我々歴史家は価値の相対主義だから、別に60点だっていいじゃないか、そういう人が社会の中でフル・メンバーとして、生きて行くような世の中でなければいけないんだと主張することは出来るよね。その主張をするために、例えば歴史における障害者の研究なん

かをすることもいいかもしれない。だからそこまではイエスです。

でもね、そういうふうに、政府とか財団とかむけに主張することが良いのかなあ、という気がする。もちょっとレット・イット・ビーでね。

橋場:財団にという訳ではなくて……。

近藤:ああ、世間一般に対してね。世間一般に対しても、それなりに知的好奇心をもっている人に対しては、歴史学の魅力みたいなことを説得しやすいわけだけど、そういうことを感じていない人に対してどういうふうにアプローチしたらいいのか、僕には解らないし、そういうことにあまりエネルギーを割くのはどうかなと思っている。というのはそういうレベルに入るとまた現実のポリティクスのことになって来るからね。世間一般に働きかける場合に、一個人としてやることはとても不可能なんで、カルチャーセンターとか、文化庁の催しとかいうのにのっかってやると、それら固有の法則性というものがあって、それに巻き込まれて色々やりたくないこともやらなくちゃならないし、言うべきことを調整する必要があるかもしれないし。そういう点であまりよくない結果を生むんじゃないかとも思うしね。

橋場:ただ、大学の先生は一応自由に発言出来るとは思いますがけれども、でもよく考えてみれば、国から給料を貰って、学生相手に教育するという仕事を負っているわけでしょう。まあ、親から莫大な財産を貰って、それで一生やっていくという歴史家は別ですが。ですからこれは端的な話ですが、もし仮に、学生が「つまんない講義だ」といって、だれも講義に出て来なかったらどうするか。でもやっぱり自分としては有意義な研究をしているつもりなんだとしたら、学生が一人も来なくても、つまんないといわれようと、その講義はやるべきなのか。

それとも、学生にしても不真面目なやつばかりではないと思いますよ、彼らなりの疑問というものを抱えて講義を聞きにやってくるんだと思います。そういう疑問が何であるかをこちらの側から歩み寄って行って、探り出して、そして自分の立場からの答えを与えるというふうにするべきなのか。これはどうでしょう。

近藤:僕はね、いささかアンビヴァレントなんだけど、毎年そういうことは出来ないけれども、時々交替でね、大学に入ったばかりの、頭の柔軟な—もしかしたら頭が硬直しきっているのかもしれないけども(笑い)、受験勉強で答えのある問題ばかりを反復練習して来た連中—、そういうのと半年くらいかなり濃密に付き合っ、て、少し古典的なものを読む—歴史学じゃなくてもいいんですけどもね、岩波文庫かなにかをテキストにして討論するとか、そういうことをやりたいな、と思うことはあるんです。

橋場:ただね、学生としては、大学院に行こうというのは少数派で、彼らの大多数は企業に勤めるなり、社会に出て、どう生きていこうかということに第一義的な関心を持っているはず。それにたいしてそういう古典を読ませるということがどれだけの意味をもつか……。

近藤:何故古典と言ったかという、だってレディー・メイドの答えなんかないんだから。人生の案内・教訓的なものを与えるんだったら意味無いと思う。というのは、それは中学高校までの受験勉強と同じパターンなんでね。そうではなくて、これまで中学高校で反復してきた勉強のパターンをぶち壊さないといけないわけだ。それは何でもいいんだよ、新聞でも、討論の材料になればね。答えのない討論をするということを、18歳から20歳くらいの間にやっとなないと、あと大変なんじゃないかと思う。もしかして、さっきの話で、大学院の修士の連中が自分の研究領域を細かく限定して、早いとこ夏休みにむこうの文書館なんかに行って、略奪者のように特定の史料だけをコピーしてもって帰って来る、そしてそれを使ってすごく狭い修論を書く。何でそうしたがつているかということ、どうも教養課程のときに、高校までの優等生的な勉強の仕方を根本的に粉碎されてないからかもしれない。

世の中に出て行く人の場合にでも、根本的には同じだろうと思う。いま僕の子供は、小学校、中学校、高校、それぞれに通っているんだけど、授業参観のときなんかひしひしと感じるのは、僕らのときとは違う緊迫した、緊張した雰囲気だよ。自由というか、遊びというか、無駄というか、そういうものが無い。ああいうところは、僕は厭だな。僕は時代が緩かったせい、ああいう緊張感というのは、小学校、中学校のころは無かったな。高校にはいったとき、ちょっと感じて厭な思いをしたけどもね。それは一つには先生方がいわゆるリベラル・エデュケーションと言うものを十分に経験していないからではないか。それからビジネスマンが海外に出て行って、ビジネスの話は出来るけれども、そのあと酒を飲みながら趣味の話が出来ない。僕、ケンブリッジで、むこうにいる日本人と色々話したときによく言われたのは、イギリス人を家に招く、そうすると奥さんは台所に引っ込んで。亭主がむこうの夫婦相手に話をしなくちゃならないんだけど、話が続かない。それは英語力の問題に加えて、根本的に共通の話題が無い(笑)。それはある時期に精神的な自由・遊びというものが無かったからじゃないのかな。自分の研究とか仕事や生き方やものの見方を相対化するような時期を、青春のある大事な時期に経験しなかったせいじゃないかな。それはかなり致命的なことじゃないか、と思う。

橘場:ただ、(その相対化ということは)歴史学じゃなけりゃできないということではありませぬよね。

近藤:僕はその点、歴史学を相対化してみている。歴史学は比較的インターディシプリナリだし、どんな学問やっても、政治学やっても経済学やっても古典学やっても、結局は歴史的パースペクティブが必要になってくるんじゃないかなんて思って、……。

橘場:そういう意味では潰しが効きますよね。

近藤:潰しが効く。(笑)それからイギリスの大学では弁護士になるためには歴史学の単位を絶対取っておかなくちゃならないとかね。

橘場:そこなんですよ。歴史というのは結構、知識じゃなくて知恵にしようとおもえば出

来る学問だと思うんですね、その知恵をおなじ歴史という素材から引き出すことを、日本では怠っているのではないかと……。

近藤:まあ、その通りでしょ。(笑い)そういうことが出来るだけの力量のある歴史学者がこれまでいなかったということなのかな。

橋場:最後に一言ということで、何か学生達にメッセージがありましたら、ひとつお願いします。

近藤:学部学生は、いろんな本をたくさん読んで欲しいと思う。どんな本でも良くてね、小説でも……。今の日本の産物じゃないほうが良いような気もするんだけど、まあいいや。現代日本の小説でもエッセイでいいんですけど、それだけに終わるとやっぱり視野が広がらないな。やっぱりね、百年かそこら以上前に出たような作品を手当たり次第に読むっていう経験をして欲しいですよ。高校大学のころは岩波新書なんか読むな、そんなものは社会人になっても読める、もうちょっと難しい本は、社会人になると絶対読めなくなるんだから、新書は社会人になるまで取っておけ、って高校生のとき言われて、そんなもんかなあなんて思ったけれども、今にして確かにその通りだと思うな。だからさっき言ったことと矛盾しちゃうかも知れないけど、新書もベストセラーも読んでいいんですけども、もっともっと読むべきものがあるんじゃないかな。

橋場:どうもありがとうございました。

タコ社長「そんなこと考えて、何か役に立つのかい？」

ひろし「もちろんですよ、そういうことを考えない人間は、本能のままに生きてしまうっていうのか、まあ早い話が、お金儲けのためだけに、一生を送ってしまったりするんですからねえ。」

タコ社長(真顔で)「それで、悪いのかい？」